

第二外国語の目標設定に向けて

— フランス語を中心に —

小林 正 巳

0. はじめに—ニーズ論と教授法の間

文部省（当時）の「大学改革設置基準の改正」（1991年）を引き金にして本格化した大学改革は、18歳人口の激減にさらされ、さらには2007年のいわゆる大学全入時代を控えて、各大学の生き残りをかけた最終段階に入ったと言っても過言ではない。「大綱化」以来全体的に見て縮小を迫られてきた教養科目、とりわけ第二外国語科目にとっても正念場を迎えていると言ってもよい。

一方、諸大学の学部や学科に冠された「国際」という謳い文句が、必ずしも文字通り多言語的、多文化的なものに結実せず、その実、単なる英語あるいは英語圏を志向したものでしかない、そのような例は少なくないと聞く。このような「国際化」すなわち「アメリカ化」という見方を視野の狭い短絡として非難する向きもあろうし、時代のニーズだからしかたがないとして無反省にこれになびいたり、いや、少なくとも学生も社会もそのような幻想を抱いているのだからその幻想を受け入れ、かき立てていくしかないとする向きもあろう。

ところで、このように大学の方針を議論する際、キーワードとして「ニーズ」という語がよく引き合いに出される。時代の、社会の、学生の、そして大学、学部、学科のニーズなど、さまざまに変奏されて改革の理由に援用されている。曰く「時代のニーズは、第一に英語の習得だ」、曰く「英語の習得は学生の第一のニーズだ」、曰く「第二外国語は専門から見てニーズは低いと言わざるを得ない」などがそれである。その裏には、「どうせやってもものに出来ないのなら、学生に負担だからやめたほうがいい」などという乱暴な論理もあるのかもしれない。少ない情報をもとに決めつけたり、詭弁、強弁のたぐいで自説にこだわったり、はたまた床屋政談風の議論もまかり通っている。自説に都合のいいニーズが次々と引き合いに出され、「ニーズ論」はますます抽象的になり迷走しがちだ。また、大学への期待度が増す一方で、いわゆる「社会的なニーズ」への過度の対応は逆説的な効果を生む恐れもあることも忘れてはなるまい。「即時的な社会的なニーズに対応した大学改革をすればするほど、臨機応変がきかないマニュアル人間を送り出すことになり、彼らが会社に入って数年たてば技術が変わってしまい、役に立たなくなるという逆説的状況が生まれて」⁽¹⁾ くるということにもなりかねないのだ。

本論では、いわゆるニーズ論に深入りせず、あくまでも現場からの議論を展開したい。だからといって、いきなり教授法をあれこれ検討するつもりもない。むしろ、その両者の間にこそ

問題は横たわっているのではないか。問われているのは、限られた時間の中で、どれだけ成果をあげられるかであって、専門の教員たちに対して、学部に対して、大学に対して、第二外国語のこれこれの授業を受ければこのレベルまで到達できるという、目標の再設定が喫緊の課題となる。これは、いわゆる「ニーズ」論と具体的な教授法との間に位置していながら、従来あまりに自明のものとして、あるいは日々の授業運営の慌しさの中で見過ごされがちだった問題と言ってもよいかもしれない。もちろん、カリキュラム構成や教授法の問題との連関を視野に入れるが、第二外国語の授業の目標を問い直すことを主眼に論を進める。まずは、第二外国語教員が置かれている現状を再認識し、授業のレベル設定について具体的に検討したい。本論が、単なる第二外国語教育論にとどまらず、広く語学教育論、さらには大学教育論につながればと考えている。

1. 第二外国語の目標設定の現状

第二外国語の、さらに第二外国語担当者の置かれてきた条件を一言で言えば、一方では「自由」であり、他方では「孤独」だったと言えるのではないか。たしかに、年度替りに教科書会議などと称して担当者を集め、その年使用する教科書や教育法についての連絡や確認が行われている大学もある。だが、自らの経験や知人からの情報によれば、ただ自分の担当科目名だけが指定されるだけで、具体的な方針や目標を指示されることもなく、また、同じ学生が履修する他の同言語科目や、次年度以降履修する上位科目との連関も明確にされないといった大学も少なくない。後者の場合、通常、具体的な目標をはじめ、試験や評価の出し方についても担当者に一任される。担当者の自由裁量が大きい分、各授業で想定される目標としては、最低限なんらかの文法項目まで、というような切り方が漠然と自己の目標として了解されているだけというのが、大多数の大学で第二外国語科目担当者の置かれている現状ではないだろうか。

自然、教える側からすれば、教科書を選定する時点で自分なりの目標は定まることになるわけだが、その際の判断基準は自らの経験を基にした「自由」かつ「孤独」な判断によるほかはない。当該大学でカリキュラムを立ち上げたときには掲げてあったはずの目標がいつのまにか空文化しているのである。「自由」には積極的な自由もあれば消極的な自由もある。また「孤独」は、結果として、孤軍奮闘にも、唯我独尊にもつながる。別段、悪意がなく怠惰でなくとも、いや、いかに良心的な教員であれ、いい意味でも悪い意味でも一国一城の主であることを強いられることとなる。

そのような幅=遊びを許す原因の一つとして、第二外国語の専任スタッフの人数が各大学で限られていること、またその必然的結果として、第二外国語教育の多くの部分を非常勤教員に依存していることが上げられよう。少人数の専任教員が多人数の非常勤教員をコーディネートすることの困難がある一方で、非常勤教員の自由と孤独は確保され、これを享受する者もいれば、それがゆえに孤立を深める者もいるのである。

2. 孤独から連携へー拡大する種々の同心円

このように、ともすれば孤立しがちな教員の取るべき手段は何であろうか。

まずは、情報収集と意見交換の場を見つけること、また適当な場が無ければ自ら作り出すことであろう。当該科目の教授法を議論する関係学会や研究会などがあればそれに所属して最新の研究成果や実戦報告に接することができよう。これを大きな輪とすれば、もっと小さな輪と(2)言ってもよいであろうが、より私的な勉強会を有志と立ち上げることも不可能ではない。そして、これらの輪は、同心円状に広がっていてもよいし、いくつもの円が重なり合っている(3)一向に構わない。

さらに、より実効的な輪として、現在教えている教育機関内での輪、すなわち広い意味でのチームティーチングが求められることは言うまでもない。「教育哲学が異なる先生が複数集まって妥協しただけの外国語プログラムは、そのひとりひとりがどれだけ優秀な教育者であろうと、つまるところ何の共通のコンセプトも持たない料理の鉄人が複数集まって、自慢の作品を並べただけのコース料理にすぎない(4)」からである。

専任であるか非常勤であるかによって、権限も責任の範囲も自ずと異なってこようが、まずは専任、非常勤を問わず、教員間での連絡を取ることが不可欠となろう。「文法」なり「講読」なり、同じクラスをいわば「裏表」で担当している教員との横の連絡、さらには、次年度担当者への引継ぎという縦の連絡、また、場合によっては、他の第二言語の担当者、専門科目や教養科目の教員、学科や学部の実務責任者との連絡といったことも必要になるかもしれない。たしかに、『教育方針』というものは、学校の教員にとって絶対的な哲学であり、これを譲歩させる(5)ということは難しい。また、立場的に反論しにくかったり、自説を展開しにくいということも出てこよう。だが、このような連絡を通して、たとえ相手を説得して自らの教育方針に沿わせるということが出来ないとしても、自らの教育内容や方針を修正したり、相手のそれに不足していると思われる部分を自らの授業で補足したりすることは十分可能となるはずである。いずれにせよ、専任教員のイニシアティブが問われていることに変わりない。

3. 基本とすべき目標設定の一例—中村啓佑氏の提案

さて、いざ議論の場が設定されたとしても、何をどのように議論したらいいのか、またどこから議論を始めればよいのかと迷うこともあろう。そのようなときの議論の基準、少なくとも議論の端緒として、中村啓佑氏が規定する目標設定が有効であると考え、ここで紹介したい。中村氏は、非専門のフランス語学習者(週2時間2年にわたって学習する者を想定)の目標を以下のようにまとめている(6)。

- 1) リズムやイントネーションを会得し、フランス語の音の特徴を音連鎖全体でとらえることができる。これ如何で将来の学習に大きな差が出る。
- 2) 音と綴りの関係を体得し、簡単なメモや手紙なら、ゆっくりとでいいからネイティブが理

解できるように音読できる。将来、書きことばを深く学ぶときに力を発揮する。

- 3) 時間をかけてもいいから、自分の生活を語り、他人のそれを尋ねられる。旅行でも最低限の用を足せる程度に表現できる。
- 4) 生活レベルの事柄について、辞書や本の助けを借りながらメモやごく簡単な手紙が書ける。
- 5) 以上のような表現と理解がスムーズにいくように、フランス語の構造に関する最小限の知識を得る。

一読してわかるように、「ゆっくりとでいいから」、「時間をかけてもいいから」、「辞書や本の助けを借りながら」、「最小限の」などの付帯条件がたくさん付いているのが特徴である。たしかに、これでは「教室では有効であっても、現実の言語生活ではまだるこしくてとても間に合わない」と言えるかもしれないし、「コミュニケーション能力」というにはレベルは低いと考える向きもあるかもしれない。だが、中村氏が続けて言っているように、「それは何の役にも立たぬ知識の寄せ集めではない。ある一定条件のものでは作動するばかりか、列挙した五つばかりの力をそれぞれ伸ばしてゆけば、そのまま現実の言語生活で使える言語能力（中略）へと発展していく、いわば潜在的可能性なのである」。

未だ「粗い」規定であり、氏自身、抽象的であることを認めてはいるが、かつてのような「一年次は直説法まで」といった目標設定に比べれば具体的目標に向かって大きく前進したことが見て取れよう。もちろん、氏の設定する目標をそのまま丸呑みせよと言っているのではない。「自分の生活を語る」といってもどこまで語るのか、「旅行でも最低限の用を足せる程度」とか「フランス語の構造に関する最小限の知識」とはどのようなものなのかを特定することも今後の課題として残っている。それでも、教員それぞれが具体的に目標を設定するにあたって、立ち返るべき一つの指針であり、その後も随時参照すべき基準となりうることには変わらない。前項であげた教員同士のさまざまな「同心円」のなかで議論する際にも、原案として、あるいは対案として活用できるのではないかと考え、引用した次第である。

4. 教員の「情動」を活用する、あるいは学生の「情動」に訴える

では、教員個人としてできることは何か。それはとりもなおさず、教授法の研究ということになろうが、その際にも設定目標を常に視野に入れておかなければならない。それも、単に「一年次は直説法まで」とか「二年次は接続法、および単純過去まで」といった、いわゆる初級文法の学習項目を言うのでもなければ、中村氏の言うような具体的なコミュニケーション能力のレベル設定のこともない。ここではむしろ、教員個人の姿勢、つまり、見つめる先という意味での目標について考えてみたい。

桑田禮彰氏は、ロンブ・カトーの「学習すべき言語が実際に生活のなかで使われている大きな空間（たとえばフランス語学習者にとってのフランス）を大風土 macroclimate と呼び、これに対してその大風土の外（たとえば日本）で学習する者が身を置く小さな空間（たとえばフ

ランス語の授業)を小風土 microclimate と呼ぶ⁽⁷⁾」という提案を援用し、両者の関係について議論した上で、最終的に学習者個人が作り上げる「個人的小風土」の重視を訴えている。そして「教育的小風土としての外国語授業は、そこに参加する学生各人の個人的小風土形成という目標なしには考えられない。外国語授業の存在理由は、学生各人の個人的小風土形成作業の援助以外の何ものでもないからである」と強調している。

教員は、正しい文法、正しい発音を教え、学生はそれを模倣する、それはそれで効用もあろうが、それでは発信的コミュニケーションにはつながりようがない。そこで、さまざまな教授法が検討され導入され、目標も再設定されていく。それには全く異論が無い。ただ、「学生各人の個人的小風土形成作業の援助」にあたって、学生が行うその作業を全うさせよう、あるいは加速させようと考えるとき、学生の心理面への配慮を忘れてはならないだろう。いわゆる「情意ストラテジー」の重要性、学習者の情意面への配慮の必要性が指摘される所以である。⁽⁸⁾

だが同時に、教員側の「情意ストラテジー」にも留意し、これを活用する必要がある。情意ストラテジーと言っても、無論、熱烈な言辞を弄して大演説をぶつことではないし、教えることから生じるストレスの解消とか自らの情緒や態度をコントロールするという消極的なストラテジーにとどまるものでもない。むしろ、教えることや学ぶことに対する熱い姿勢、さらには自らが教える言語やその文化に対する熱い想いを学生に見せつけ、その情動に訴えるということも、積極的な意味でのストラテジーとして議論されるべきだと考える。

実際、われわれ第二外国語教員の大部分は、大学入学後に初めて英語以外の言語に接したはずだ。その際、自らを内面から突き上げる個人的な衝動に駆られると同時に、担当教員がときおり見せる当該言語へのただならぬ欲動、衝迫、憧憬といったものに、ときに驚愕し、ときに呆れつつも、これを共有したい、そのような欲動の源泉に分け入ってみたい、そんな想いにも突き動かされたのではなかったか。

あるミュージシャンは、「スタイルの模倣」について自分なりに発見した「コツ」を次のように披瀝している。「模倣のレベルのチャンネルを1つ変えるんだ。例えば、ギタリストがギターを持って『あいつの鳴らしたあの音を自分も鳴らしたい』って思っちゃ、もうだめなんだよね。(中略)自分の大好きなあいつがああの音を鳴らした時の『気持ち』をコピーするんだよ！」⁽⁹⁾つまり、衝動を模倣するのだと。

言い方をかえれば、原点に帰るということにすぎないのかもしれない。誘惑された者が今度は誘惑する側に回るということ。何なら、「誘惑」を「挑発」と言い換えてもいい。また、「(英語による世界制覇によって)世界がこういうふう⁽¹⁰⁾に構造化されてしまった、そのこと自体に対する異議申し立て」を訴えてもいい。だが、それを恣意的に発動するのと、意思的に、戦略的に活用するのでは大違いであろう。その可能性を具体的に論じるのも今後の課題と言わざるを得ない。

5. おわりに

理系の大学の教員であった黒田龍之介氏は、「理系大学の学生は、なぜ英語以外の外国語を学ばなければならないのか？」との問いに、「教養」や、将来増すかもしれない「実用性」といった議論を退けた上で、「理系の学生に外国語に対する抵抗感をなくす、(中略)新たな外国語を学ぶノウハウを身に付けるためのシミュレーション」であると強調している。そして、それでは英語をきちんとやった方が得ではないかという反論には、「英語はすでに長年にわたって勉強しており、『手垢』がついている状態で(中略)新たな外国語学習のノウハウを学ぶためのシミュレーションには不向き」⁽¹¹⁾だと言う。

これはこれで、特に理系の学生を、それも自分なりの学習方法がある程度確立できている学生を対象にした第二外国語の目標設定としては説得力を持つものであろう。だが、むしろここで教訓にすべきは、それぞれの大学で、その学生が置かれた状況によって臨機応変に目標は設定されていいし、またされなければならないという、言ってみればごく当たり前の事実である。学生の専門分野、カリキュラム全体の中での第二外国語の位置付け、第二外国語科目全体の中での当該科目の位置付け、クラスの数、使用可能な機器などを含めた教室環境など、教室の数だけ異なる条件があるのであり、それぞれに対応が必要となる。

その際、まず必要となるのは、制度的には困難な面もあるかもしれないものの、可能な限りチームティーチングの方向へと持っていくこと、そして「自由」と引き換えにしてでも「孤立」を避けることであろう。議論の基準としては、少なくとも発端としては、上述のような中村氏の規定を援用してもいい。丸呑みするかどうかはともかく、参照するに値する。また、個人としてその具体的な実践にあたっては、教員の「情動」を活用し、学生の「情動」に訴えることの効果についても検討すべきではないかと考える。

教室の外での連携と、教室の中での連帯、そして共鳴、この古くて新しい問題が、改革の時代に改めて問われていると言ってよい。

(注)

- (1) 岡田知弘「補 改革の現段階と問題点 一、京都大学」、『大学改革 最前線—改革現場と授業現場』藤原書店編集部編、藤原書店、1995、p.248
- (2) フランス語教育の場合、日本フランス語教育学会をはじめ、関東を中心とした「ペダゴジーを考える会(PEKA)」や「Journée pédagogique」といった催し、また、関西を中心とした「Rencontres」などがそれにあたる。また、今日では、さまざまなレベルや規模で開設されているメーリングリスト(「dfle (didactique du FLE)」や「frenchling」など)も有効に機能していると言ってよい。
- (3) 筆者自らが参加した、桑田禮彰・杉村裕史・中川信吾・久松健一・小林正巳『フランス語教育を考える—大学から外国語が消える?』、富岳書房、1994などは、小さいながらも一つの「輪」の中での議論が結実したものである。筆者自身、本書が刊行されるまでに著者間で繰り返し開催された勉強会やシンポジウムによって、フランス語教育をめぐる諸問題について、また議論の提示法などについても大いに啓発された。

- (4) 関口一郎『「学ぶ」から「使う」外国語へー慶應義塾藤沢キャンパスの実践』集英社新書, 2000, p.71
- (5) 前掲書, p.78
- (6) 中村啓佑「フランス語教育の領野と教員の仕事」, 「大手門学院大学文学部紀要」第22号, 1988, pp.335-336。引用は小林の要約である。同時に中村氏は, 専門学習者(フランス語専門学科の学生で4年間学習する者を想定)の目標について以下のように規定している。「日常生活レベルのフランス語にはそれほど不自由しないばかりか, 例えば関心のある社会問題についてなら, 少々時間はかかっても, まわりくどくも, 何とか自分の考えを伝える程度の力である。読むことの好きな者なら, 辞書の助けを借りつつも好みの本を楽しめる程度, こみいったことがらでなければ書ける程度の力を持つことになる」(前掲書, p.334)
- (7) 桑田禮彰「外国語授業運営の基礎」, 「外国語部論集《特集 外国語教育を考える》」第55号, 駒澤大学外国語部, 2001, pp.75-76
- (8) 原田早苗「効果的な外国語学習ストラテジーとは?」, 「フランス語教育」第26号, 日本フランス語教育学会, 1998, p.61
- (9) 甲本ヒロトの発言。浅草キッド『濃厚民族』, スコラマガジン, 2003, p.252
- (10) 野崎歆の発言。斎藤兆史・野崎歆『英語のたくらみ, フランス語のたわむれ』, 東京大学出版会, 2004, p.47
- (11) 黒田龍之介『外国語の水曜日ー学習法としての言語学入門』, 現代書館, 2000, p.10